

など、衣に著ると云へる趣同じきを以ても、榛は波理と訓むべきことを知るべし、さて又榛の字をさに雙べて、榛とも書けるに、つくをなほ萩ならむかと疑ふ人もあるべけれども、榛は榛と字の通ふを以て通はし書けるのみなり。

〔倭訓栞

前編

二十四〕はぎ

日本紀には、榛字篆字などを用て、はりともかはぎとも訓せり、篆も榛

に同じ、潘岳詩に、荆棘成榛といへば、はりは針の義なるべし、よて万葉集に針原とも書せり、はぎははりの木の略なるべし、かはぎといふは木萩の義、今きはぎといへり、万葉集に眞榛といへる物にして、顯昭の大萩といへるも同じ、本たちの木はかれずて、としごとに古枝よりはか枝を生ず、よて古今集に、秋はぎの古枝にさけるとよみ、又本あらのこはぎとよめり、是一種也、冬は枯て春は生出て、長く糸を垂るものは、又一種也、同種に夏萩あり、花の時をもて名く、白花あり、飛入あり、されば體源抄にいへる如く、木類あり、草類有て、ともにはぎなれば、万葉集に木類には榛をかり、草類には芽子と書せるにや、奥州の宮城野、信濃の山路などにはいと大なる木もありて、弓などにも作るといへり、梢に青き枝生て花さく、故に宮城野の本あらのこ萩ともよめり、本のあらはなる意也とぞ、又年毎に刈て若ばえ出たるが、たをやかに高く、一丈餘りも打みだれて花咲也ともいへり、宗祇旅日記に、本あらのさくらなどもよめれば、春刈のこしたる去年の古枝に咲たるをいふと聞置きたるに、宮城野のあたりに、もとあらといふ里ありて、色なども外には殊なる萩のありし、枝ざしなべての萩よりもそはくしく、あばら也といへり、今宮城野と稱するは、四月に花咲り、芳宜花の宴は、仁明紀に出たり、新撰万葉集には、芽とのみ書させ給へり、唐韻に芽は草名也といへるに据するか、漢語抄に鹿鳴草と書るは、詩小雅呦鹿篇の意を取也、萩をよむは和名抄より見えたり、新撰字鏡に萩をいらと訓じ、蒿蕭類と注せり、史貨殖傳千樹萩の注には、梓木也と見えたり、二合字の意にて、はぎと訓せしにや、菅清公尾州記には、ぎ田を藤木田と書せし